

## 幼児のウサギへの心情を絵本は活性化できるか (2)

——ウサギとの親密さと絵本の読み聞かせの効果——

○ 二 宮 稔  
(十文字学園女子短期大学)

曾 根 田 寛  
(前野保育園)

### 1・目的

ウサギは、多くの幼稚園や保育所で飼育されているが、そうしたウサギに対する幼児の思いを、さらに多様で豊かなものにすることができれば、より実り多い保育につなげて行くことが可能であろう。筆者らは、そのためにウサギの絵本が役立てられるのではないかと考え、一昨年は81冊のウサギの絵本の中から特に選んだ3冊の絵本に対する幼児の反応の基礎調査を行い、その結果の一部を昨年度の第47回大会において発表した。本年度は、ウサギの絵本が幼児の心情にあたる効果が、幼児のウサギとの日常的な関わり方の違いにより、どう異なってくるかについて若干の調査を行ったので、その結果について発表する。

### 2・絵本の選択

前回、基礎調査に用いた3冊の絵本のうち、今回の調査では「ましろのあさ」(いもと ようこ 作・絵金の星社 1983)を使って読み聞かせを行った。本書を選んだ理由は、飼われていた主人公のウサギが逃げだして苦難に遭うというストーリーが、幼児にとっても分かりやすく、前回の調査では5歳児にある程度の共感を呼んだこと、普通に読み聞かせた場合の所要時間が約10分と比較的短く、幼児が飽きないこと、などである。

### 3・調査対象

調査対象としては、ウサギとの関わり方の違いを考慮して、次の4園4クラスとした。

#### A 保育園 6歳クラス (a組)

A保育園ではウサギは飼育していないが、後述するような理由により、a組の子どもたちはウサギを観察したことがあり、具体的なウサギの姿を思い浮かべられるものと考えられる。

#### B 幼稚園 5歳児クラス (b組)

B幼稚園では、平成6年秋からb組で、「クララ」と名づけたウサギをペットケージを用いて飼い始めた。b組の子どもたちが交替で飼育当番をつとめるほか、

自由時間には餌を与えたり、ケージごしに撫でたりする姿がみられる。

A保育園とB幼稚園は同じ町内の割と近い位置にあり、もともと顔見知りの園児同士が多いことや、両園とも園児数が少ないこともあって、時には同年齢同士の交流がある。従って、a組の子どもたちはクララを見て知っており、触れ合ったことのある者も多い。

#### C 幼稚園 4歳児クラス (c組)

C幼稚園では、園舎に隣接して設置されている飼育舎でウサギを1頭飼育しているが、名前はずけられていない。また、園児による飼育当番はない。保育は室内での活動が主で、園庭に出て遊ぶのは午後の短時間になることが多く、この時ウサギとの触れ合いはほとんどみられなかった。

#### D 幼稚園 4歳児クラス (d組)

D幼稚園では、園庭の中程に2つの飼育舎がならんでおり、それぞれに「ピョンコ (オス)」「モモ (メス)」と名づけられたウサギが飼われている。園児による飼育当番が行われているほか、家庭から野菜を持参して与える子どもも多い。この園では、自由保育を主としているため、園庭で遊ぶ子どもが多く、飼育舎に入つてウサギを撫でたり、抱いたりする姿がよくみられた。しかし一方で、多数の子どもが同時に飼育舎に入つたためウサギが身動きできなくなったり、抱いている手を急に離してウサギを落としてしまう様子も観察された。

### 4・調査方法

保育室に園児を集め(クラス全員)、まず園やクラスで飼育しているウサギや園児が知っているウサギについて話題にし、c・d組ではもし逃げたらどうなるだろうかと問いかけた。次に、小屋から逃げだしたウサギのお話という紹介をして「ましろのあさ」を読み聞かせ、終了後、絵本の内容や、園児の知っているウサギについて再び話題にする(a・b組では、もし逃げたら、と質問する)、という流れで反応を調べた。

園児の反応やクラスの雰囲気記録には、メモ、カ

セットテープ、ビデオテープなどを適宜使用したほか、一部は記憶によった。

## 5・結果および考察

以下に、同年齢の2クラスずつ比較、考察する。

### A保育園a組とB幼稚園b組

ともに、読み聞かせる前には目立った反応はなかった。読み聞かせている間、b組は私語ひとつなく話に聞き入っていたが、a組では「ましろ」が金網張りの小屋にいる場面で「かわいそう」、夜の森をさまよう場面で「……おかあさん……（前後聞き取れず）」など、時折感想がもれた。終了後の、もしウサギが逃げたらどうなるか、という問いには、質問のしかたの関係もあって、園児は「ましろ」がこのあとどうするか、と解釈したらしく、「おうちへ帰る」「このまま外でくらす」の2つの意見に分かれた。挙手させたところ、a組は「帰る」6名、「外」11名、b組は「帰る」5名、「外」8名で差がなかった。

ウサギとの日常的な触れ合いの機会は、園での生活に関する限り、b組の方がずっと多いものと考えられる。しかし、読み聞かせに対する反応には殆ど差がなく、全体的な雰囲気は、むしろウサギを飼っていないa組の方が積極的のように思えた。b組でウサギを飼い始めてから、まだ日が浅く（約2か月）、十分に慣れていないこと、保育担当者によれば、a組は割と活発で物怖じしないのに対し、b組はおとなしい静かなクラスという性格の違いが影響したように考えられる。

### C幼稚園c組とD幼稚園d組

読み聞かせに先立つ、園のウサギが逃げたらどうするか、という問いに対しては、

c組「またつかまえる」「ほかの（を）飼えばいいじゃん。今度はネコ飼おうよ」

（以下、続けて）

逃げたウサギは食べ物がない、大丈夫だろうか。

「僕が食べ物あげに行くよ」「大丈夫だよ、おじさんとかがやってくれるよ」

だれも来ないような所だったらどうだろうか。

「だれかいるよ」

d組「逃げないよ、ピョンコ」「どうやって逃げるの？」「逃げたらどうするんだろう」

（以下、続けて）

こっそり逃げだしちやうとしたら？

「それで、死んだりしたり」

などの発言があった。

読み聞かせの最中は、d組では場面によって感想を述べた園児がおり、小屋を逃げだした「ましろ」が食べ物を捜すが見つからない場面や、夜の森の中で恐がる場面では、

「おうちに帰ればいいじゃん」

「でも道が分かんないんじゃないの？」

という声などが聞かれた。

終了後、「ましろ」はどうして逃げたのだろうかと質問したところ、c組では、

「嫌だったから」「出たかったから」

C幼稚園のウサギも、柵の中にいるのが嫌だといって逃げてしまわないように、皆でもっとかわいがってあげてね、と言うと、

「うん」「あたしはかわいがってるよ」

などの発言があった。

一方、d組では、

「出たいから」「狭いから」「お外で遊びたいから」

もしかしてモモちゃんもピョンコも逃げたりして……と言ってみたところ、

「えー」「そんなうそなこと言わないで」「そんなことしないよ」「そうだ、そんなことしないよ」

と口々に否定する言葉が聞かれた。

さらに、ピョンコもモモちゃんもいっぱいかわいがってあげてほしい旨伝えると、

「はい」

と、反応は非常に強かった。

c組とd組では、日常的なウサギとの接し方が大きく異なり、d組の方が親密にウサギと触れ合っていると言える。c組の多くの子どもたちにとって、飼っているウサギがいなくなることは、さほど残念ではないのに対し、d組ではモモとピョンコは、いなくなるなどとは考えたくない大切な友達になっていると言えるだろう。

## 6・まとめ

◎ウサギとの日常的な関わりが親密なクラスでは、絵本の読み聞かせの効果が大きい傾向があった。

## 7・謝辞

本研究を行うにあたり、東京家政大学教授山内昭道先生には、様々な面で世話になりました。また、東京家政大学学生の斉藤明美さんには、卒業研究の一環として、C、D両幼稚園における調査を実施していただきました。この場を借りて、深く感謝いたします。